

## 生産費調査からみたでんぷん原料用甘藷作の特徴

久保田哲史(九州農業試験場)

Tetsufumi KUBOTA : Characteristic of Farming on Sweet Potato which use Starch on the basis of the Production Cost Survey of Agricultural Products

## 1. はじめに

南九州畑作農業を支える基幹作物のひとついでんぷん原料用甘藷(以下、甘藷と略)がある。近年、この甘藷をとりまく情勢は非常にきびしく、南九州の各地域では甘藷作の収益向上のためさまざまな努力が行われている。そこで、本稿では農水省「鹿児島県における甘藷生産費調査」のデータに基づいて南九州甘藷作の特徴と問題点を明らかにし、コスト低減の方策や可能性を考察する。

## 2. 費目構成比からみた甘藷作の特徴

第1図より、甘藷作は労働費の割合がもっとも大きく、かつ、その推移についても増加傾向がみられることがわかる。周知のとおり、他の土地利用型作物(本稿では水稲、小麦、ビール麦と比較している)では労働費割合は相対的に小さく、かつ、その推移は減少傾向にある。

また、甘藷作は農具費割合が小さいということもわかる。そして、この農具費割合は昭和30年代以降、畜力費割合を徐々に駆逐していったが、畜力費を駆逐してしまった後の伸びがみられない。

ところで、甘藷作の現状の10a当たり生産費を見ると、甘藷作は他の土地利用型作物に比べて労働費がもっとも多く、農具費がもっとも少ない、という2点が指摘できる。

以上のことから、甘藷作の大きな特徴として省力化の遅れ、機械化の遅れが指摘できる。甘藷作における機械化は、畜力に依存していた作業については動力に置き換えられてきたが、従来から人間労働に依存していた作業は機械化から取り残されるというかたちで展開してきたと推察される。そして、このことが甘藷の生産費が土地利用型作物のなかでは相対的に高いほうに位置することの主原因になっている。事実、物財費を比較すると、甘藷作は相対的に低いほうに位置する。

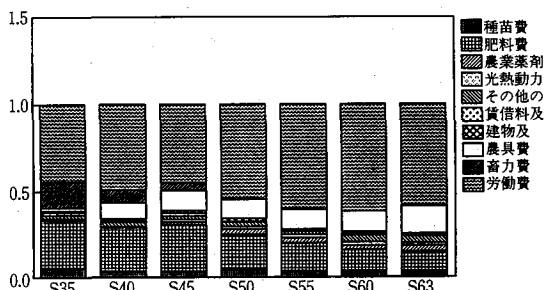
## 3. 甘藷作の10a当たり労働時間について

第2図にみるように、甘藷作の労働時間は微減傾向で推移してきている。しかし、これを他の土地利用型作物の労働時間の推移と比較すると、甘藷作ではほとんど省力化が実現されていないということがわかる。しかも、もっとも労力のかかる収穫調整、播種定植の2作業がまったく省力化されないまま推移してきている。このため、現在では他の土地利用型作物と比較するともっとも労力のかかる作物となっている。甘藷生産は労働ピークが従来のレベルのままに残されて現在に至っており、この点が他の土地利用型作物との大きな相違点にもなっている。

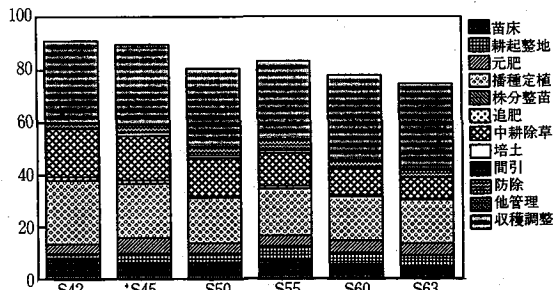
## 4. 甘藷作のコスト低減の方策

以上の分析から、甘藷作のコスト低減の方策としては省力化がもっとも効果があるということ、そして、その省力化には労働ピークの打破を伴わせる必要があるということが明らかになった。ところで、この方策には機械化が欠かすことのできない要件となっている。甘藷作における動力使用時間の推移を見ると、昭和50年代前半からはほぼ横ばいで推移しており、各作業ごとにみても横ばいで推移している。つまり、甘藷作の機械化は現在壁にぶつかっており、画期的な技術開発が待たれている状態である。現在、そのための試験研究が進められているが、経営経済的にみて実用化には時間がかかるのではないかと思われる。

現時点での方策としてはマルチ栽培の普及が考えられる。これは単収増と作期幅の拡大による労働ピークの軽減=作付面積の拡大を可能にするという2つの効果にもとづくコスト低減方策である。近年、鹿児島ではマルチ栽培面積は着実に増加してきており、平成元年では甘藷の全作付面積中31.5%(4,451ha/14,111ha)をしめる。この方向に南九州甘藷作の1つの可能性があると思われる。



第1図 鹿児島県の10a当たり甘藷生産費目構成



第2図 鹿児島県の10a当たり甘藷作労働時間